

性同一性障害(GID)を取り巻く現状と X ジェンダーについて

「ぼくが『性別ゼロ』に戻るとき」映画解説
Full Spec Edition

Revision 1.0

Released 2021.6.6

label X

このたびは、映画『ぼくが性別「ゼロ」に戻るとき』をご覧頂きありがとうございました。「ぼくゼロ」は、性的マイノリティいわゆる LGBT と総称される中から、トランスジェンダー当事者の方を 9 年間にわたって追いつけたドキュメンタリー映画です。

本映画の監督である常井美幸さんに初めてお会いしたのは 2018 年 9 月のことです。X ジェンダー当事者のオフ会を label X 主催で行う準備を進めていたところ、当時 NHK 系列局でディレクターをされていた常井さんから撮影取材の申し入れがありました。クローズドなオフ会を前提にしていたので判断に迷うところもあったのですが、代表の藤原和希と相談した上で取材を受けることにしました。思い返せば、ぼくゼロの主人公が予想外の変化をしていく中で、X ジェンダーのことをもっと知りたくなったのだと思います。

そうした経緯もあって、「ぼくゼロ」には代表の藤原も出演しております。一方の私は映画に直接関わることはありませんでしたが、2021 年の関学レインボーウィークで映画上映会とミニ解説を担当することになりました。ただ、あいにく新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、学外の方に参加頂くことができない状況にあります。そこで、映画上映会当日の PowerPoint によるプレゼンテーションの他に、読み進めるタイプの解説資料として本書を作成することにしました。

本書の解説の前半では、性同一性障害(GID)を取り巻く現状について、基本的な用語のおさらいや過去の歴史的経緯を踏まえつつ、性別移行のプロセスやここ数年間のトピック、今なお残されている課題について説明しています。

後半では X ジェンダーについての解説を書き記しました。当事者団体の役員をしておりますと、マジョリティーの方や、GID の診断を受けて性別移行を果たした当事者の方から、なぜ X ジェンダーを自認する当事者がいるのか分からない、という声を聞くことがあります。実際、これまで X ジェンダー当事者による説明資料は極めて少ないというのが現状でした。本書では、マジョリティー側の視点からでも理解の手掛かりが得られやすいポイントとして性指向との関連性について取り上げており、要点を絞って分かりやすく説明したつもりです。本来であれば「FtM ゲイ」のような事例も説明として取り上げるべきなのですが、予備知識の少ない方の理解を優先するために今回は入り組んだケースの説明は割愛しました。

本書は、基本的に 1 テーマにつき 1 ページの構成としております。映画本編を見ただけではよく分からなかったところがあれば、後から本書の該当箇所をお読み頂くことで理解の助けになれば幸いです。また、興味・関心のあるテーマのみを取り出して教材に使われることも想定しており、教育現場などでもご自由にお使い頂ければと思います。

もし、先に本書をお読み頂いてから映画本編を見たくなった方がおられましたら、映画関係者や筆者としてこれ以上の喜びはありません（なお、本書には映画のネタバレが含まれていますのでご注意ください）。

X ジェンダー会員制自助サークル label X (ラベル・エックス)
副代表 諏訪崎 龍

目次

- ・「性」のさまざまな要素
- ・トランスジェンダーとは？
- ・トランスジェンダーが望むこと
- ・トランスジェンダーと性他認
- ・トランスジェンダーと性同一性障害(GID)の違い
- ・性同一性障害(GID)に関する国内年表
- ・GID 学会
- ・GID の治療を受けるには
- ・GID の「脱病理化」
- ・GID の治療内容
- ・GID の診断・治療に対する健康保険適用状況
- ・トランスジェンダーの戸籍変更
- ・法的な性別の変更条件
- ・特例法施行後の性別変更件数
- ・性同一性障害(GID)に関連する裁判事例 (1)
- ・性同一性障害(GID)に関連する裁判事例 (2)
- ・X ジェンダーとは？
- ・トランスジェンダーと MtF/FtM/MtX/FtX
- ・マジョリティーの目線で見ると性別の世界
- ・X ジェンダーから見た性別の世界
- ・性指向が性自認に与える影響
- ・性指向の「引力」と「反発力」
- ・X ジェンダーの性指向
- ・X ジェンダーが社会に望むこと

「性」のさまざまな要素

- ・ 性自認（性同一性） **Gender Identity**
⇒ 自分が帰属すると継続的に感じている、自分自身の性別
 - ・ 性指向 **Sexual Orientation**
⇒ 性的に好きと感じる（恋愛や性愛の対象となる）性別
 - ・ 身体の性 **Sex**
⇒ 性染色体や外性器・内性器、体型などによって分類される性別
 - ・ 性表現 **Gender Expression / Gender Presentation**
⇒ 見た目や言動、立ち振る舞いによって識別される性別
-

まずは、男女の「性」について基本のおさらいをしましょう。一口に「性」あるいは「性別」といっても、様々な切り口があります。「ぼくゼロ」の映画では「性自認」「性指向」「身体の性」「性表現」の4つが取り上げられています。

性自認は「自分が思う自分自身の性別のこと」と説明されることが多いですが、正確さという点ではちょっと物足りません。なぜなら、「思う」という言葉のニュアンスには「(自分の意思で) 思い込む」ことが含まれるからです。性自認は「思う」のではなく「(心の中に) 自然と湧き上がる」ものです。一番大事なのはその性別に対する「帰属感」であり、その感覚を一時的にではなく継続的に実感しているかどうかです。

性指向もまた、「好きになる」というよりは「好きだと感じる」ものと説明した方がよいですね。性指向の説明には「恋愛」という言葉がよく使われますが、「一目惚れする性別」つまり意識した訳ではないのにふっとその人に視線が向いて、好きだと強く感じてしまう性別である、と考えた方が理解しやすいかもしれません。好きだと感じる性別は、身体の性が要素として重視されることが大多数の共通認識です。

性自認と性指向は「自然に感じる」結果によるものであって、自分の意思で決まるものではありません。「なぜそうなのかは理屈で説明できないけど、自分の性自認は〇〇で、性指向は□□だ」という性質のものなのです。

身体の性は、実際には性染色体だけではなく色々な要因によって決まってきます。男女によって差が大きい要素としては体脂肪率・肩幅・胸部・骨盤・外性器・声質・体毛の濃さといったものが挙げられますが、そうしたものを自分の身体として自然に受け入れられない嫌悪感のことを「身体的な性別違和」と呼びます。「ぼくゼロ」の主人公が自分の身体に第二性徴が来たときに直面した問題がまさにこれで、児童期から思春期の時期に身体的な性別違和を自覚することは、自分の身体の性が性自認と一致しないことに確信を持つ決め手になることが多いです。

トランスジェンダーとは？

トランスジェンダー (Transgender)

⇒「出生時に割り当てられた性別 (assigned gender)」とは (身体的に・社会的に) 異なる性で生きようとする人、現に生きている人

『ぼくが性別「ゼロ」に戻るとき』の主人公の場合……

- ・ 服装を女性のものから男性のものに変えたい → 変える
- ・ 女性的な身体を男性的なものに変えたい → 変える
- ・ 他者から男性として見られたい、扱われたい → 頑張る

トランスジェンダーの定義には、厳密には「割り当てられた性別 (assigned gender)」という用語が使われます。そのような分かりにくい用語ではなく「身体的な・生物学的な性別」という言葉でいいじゃないか、という意見も聞こえてきそうですが、現実には性分化疾患のように外見だけで身体的な性別が判別できない場合や、XX・XY 染色体が身体的な性別と一致しない場合もあって、そうは問屋が卸してくれません。

つまり、人間の人体が設計図通りに仕上がるかどうかは実際のところ「かなりいい加減」なのです。ですが現代社会では、子供が生まれたら外性器の見た目で見れば男の子か女の子かを判断して役所に出生届を出しますし、親は何の疑いもなくその性別だと思い込んで子供を育てようとします。「割り当てられた性別」という概念が使われるようになったことには、そういった背景があります。その子が産み育てられた性別は、その子自身が判断した訳ではありませんが、圧倒的大多数の場合それで何の問題も起きません。

ところが、レアケースながら、割り当てられた性別に本人が「馴染めない」ケースがあります。

「馴染めない」というのには個人差があります。例えば、幼少期の頃から「なんで自分の身体は男の子(女の子)なのだろう」と日常的に感じていて思春期が来ると自分の身体の変化に耐えられなくなってしまった人もいますし、そうした違和感を漠然と持ちながら思春期の変化も我慢して乗り切ったものの、恋愛や結婚を経て「やっぱり男性(女性)として生きるのは無理！」と気づくのに至ったという人もいます。

そうした人は、「割り当てられた性別」とは異なる性別の服装や外見で生活すると生活の質が改善することが多く、やがて 24 時間 365 日を望みの性別で生きることが目標になるようになり、実際にゴールにたどり着いた当事者も数多くいます。これがトランスジェンダーです。

「ぼくゼロ」では、主人公は女性の身体で生まれ育てられてきた人が、自分の身体が女性であることに耐えられず、やっぱり女性として生きるのは無理だから男性として生きようと決めて、自分の外見や身体を変えていきます。これはまさにトランスジェンダーです。そのためには他人から男性として認識してもらう必要もあるので、文字通り必死のバッチで頑張るわけです。

トランスジェンダーが望むこと

トランスジェンダーが一番に望んでいること

⇒ 望みの性別で、他の人と同じように暮らすこと

・元の性別を知らせるのは、伝える必要のある人と、親しいごく一部の人だけ

トランスジェンダーが一番に望むこと、それは望みの性別で、他の人と同じように暮らすことです。「他の人と同じように暮らす」というのは、特別な人間としてではなく、一人の人間として世間に溶け込んで生活を送るということです。不特定多数の人たちから好奇の目で見られない、と言った方がよいかもかもしれません。トランスジェンダーは、決して世間の見世物ではありません。

トランスジェンダーが人口に占める割合は1%もありません⁽¹⁾。ですが、社会の中に確実に存在しています。かつてはトランスジェンダーの職種と言えば夜の街というイメージが強いものでしたが、**現実には多くの当事者が昼間の仕事で他の人と同じように働いています**。多くの方は、トランスジェンダーがまわりに全くいないように感じていると思いますが、それはただ単に存在に気づいていないだけなのです。

当事者の中にはアクティビスト（活動家）の方々のように自分の顔を公表している方もいますが、そうした人はごく一部に限られます。多くの当事者は、自らがトランスジェンダーであることを公の場所でオープンにすることはありませんし、望んでもいません。同居家族以外に元の性別を知らせるのは、どうしても伝える必要のある人（例えば勤務先の人事部）や、親しいごく一部の人にだけというケースが多いです。

また、トランスジェンダーが無事に性別移行できるかどうかは同居家族にかなり左右されます。「ぼくゼロ」における主人公のお母様のように、理解し支援してくれる人が家族の中にいれば、本人の精神的負担は相当に少なくなります。逆に、家族の誰一人からも理解が得られず家出を余儀なくされた場合には、精神的にだけでなく生活面で金銭的にも追い詰められてしまうケースが少なくありません。

ですから、トランスジェンダーが自分の過去と現在の両方を打ち明ける人がいるとしたら、それは本人にとって信頼のできる人に限られます。ですから、もしトランスジェンダーであることをカミングアウトされるようなことがあれば、（本人が切羽詰まって告白してしまったというケースもありますが）それは貴方が本人から信頼されている証なので、じっと話を聞いてあげてください。

トランスジェンダーの中には、既に望みの性別に溶け込んでいるベテランの方もいれば、異性装での外出にチャレンジし始めたばかりの新入りさんもいます。もし、街中でトランスジェンダーと思しき人を見かけても、指差しせずに黙ってスルーするか、場当たり無く対応するのがマナーです。

(1) 「トランスジェンダーの割合をどう測るか」（金沢大学 人文学類/人間科学系 岩本 健良）

http://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI/*20191006-2 日社岩本報告【最終版】.pdf

トランスジェンダーと性他認

性他認

⇒ 他者から認識される性別のこと

- ・トランスジェンダーが望みの性別で生きる上での QOL に影響する
-

トランスジェンダーを志す人は、自らが希望する性別の恰好さえすれば待ち望んでいた生活を送ることができるかという、そうではないですね。人間は社会的な生き物ですから、いくら自分が女性（あるいは男性）だと思っても、不特定多数の人たちからその性別で認識されないことには満足のいく暮らしをすることは難しいはずです。

他者からどのような性別で認識されるかを「性他認」を呼びます。性他認は、トランスジェンダーが望みの性別で生きていく上での生活の質（Quality of Life）に大きく影響します。その要素は服装やメイク・髪型といったものだけではなく、声質・言葉遣い・立ち振る舞い・人付き合いの仕方など非常に多岐にわたります。そのため、望みの性別へ移行するにあたっては、その性別での実生活経験(RLE)を積んでいくことが非常に重要です。

ホルモン補充療法は性他認獲得に寄与する面もあります。身体的女性に男性ホルモンを継続的に投与すると見た目の男性化が進行して男声への声変わりも起きるため、一般的に周囲から男性として見られやすくなるようです。身体的男性に女性ホルモンを投与した場合については個人差が出やすいようですが、いったん声変わりした男性が女声を獲得するには特殊なボイストレーニングを必要とすることから、性別移行への大きな関門の一つとなっています。男声と女声の違いは、単に声帯の長さだけではなく声道の長さや形状の違いによる面もあるため、喉の手術を受ければ男声・女声を得られるという訳ではありません。

ところで、近頃はトランスジェンダー女性が女性トイレなどの女性用施設を使うことを極度に恐れる風潮が世間の一部にあります。その背景には、トランスジェンダー女性に女性トイレの使用を認めると、性加害を意図した男性がトランスジェンダー女性を騙って女性トイレに入る口実を与えるではないか、という不安があるようです。

これは、トランスジェンダーの実態が一般に知られていないことが原因といえましょう。このようなケースにおけるトランスジェンダーの行動指針は明快で、「郷に入っては郷に従え」です。つまり、現実には女性としての性他認を獲得した人だけが女性トイレを使用しています。

しかし、トランスジェンダー女性の性他認には個人差が大きいところがあり、容姿に恵まれない人や性別移行し始めてから日の浅い人の場合は多目的トイレを使用するケースが多いようです。そうした人の中には外出時のトイレそのものを我慢する人もいることを考えますと、老若男女を問わず誰でも利用可能なトイレの数を増やすことが社会には求められるでしょう。

トランスジェンダーと性同一性障害(GID)の違い

トランスジェンダー (Transgender)

⇒ 元の性別とは異なる性別で生きようとする人、現に生活している人
(本人の生き様によって決まるもの、当事者が自ら名乗るもの)

性同一性障害 (GID, Gender Identity Disorder)

⇒ 「自らの身体的性別に対する精神的苦痛」を意味付ける医学的な診断名
(医師によって与えられるもの)

日本国内では、おそらく「トランスジェンダー」よりも「性同一性障害(GID)」という言葉の方が聞き馴染みがあるという人の方が多いのではないかと思います。理由については後述しますが、そうした背景もあるせいか両者はしばしば混同されがちです。ですが、本当は似て異なるものです。

「トランスジェンダー」とは、割り当てられた性別（平たく言えば、元の性別）とは異なる性別で生きようとする人、現に生活している人のことです。つまり、本人の生き様によって決まるものです。また、その人の生活実態に判断の重点が置かれる概念であって、性別適合手術を受けたかどうかは関係ありません。

それに対して、「性同一性障害(GID)」とは医学的な診断名です。本人が自らの身体的性別に対して非常に耐えきれない精神的苦痛を感じているのを医師が確認して、「この人には精神的・身体的な治療が必要だ」と判断したときに付けられるものです。つまり、GID の診断を付けてくださいといくら本人が希望しても、医師が「あなたは GID ではありません」と判断したら、その人は GID ではないというわけです。

なぜ「性同一性障害」という診断名が必要かと言うと、身体的治療を伴うものであるからです。性別適合手術(SRS)は言うに及ばずですが、ホルモン補充療法(HRT)も身体に不可逆的な変化をもたらします。男性に女性ホルモンを数カ月も投与すれば男性として性的不能になり、生殖能力も永久に失われます。女性に男性ホルモンを投与し続ければ、男性と同じように声変わりが起きて自然には元に戻りません。ですから、もし性同一性障害でない人が間違っただけで自分とは反対の性別のホルモンを打ってしまうと、おそらくその人は「本物の」性同一性障害の人たちが受けているのと同じ苦痛を味わうことになってしまうでしょう。

性同一性障害の診断に誤診があっては一大事なので、医師には慎重かつ客観的な判断が求められるわけです。日本精神神経学会が定める「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン⁽²⁾」では、2人の精神科医が性同一性障害と診断することにより診断が確定します。

(2) 性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン (第4版改)

https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/gid_guideline_no4_20180120.pdf

性同一性障害(GID)に関する国内年表

1969年2月	ブルーボーイ事件
1997年5月	性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン(初版)策定
1998年10月	日本国内初の公式な性別適合手術が行われる (埼玉医科大学)
2001年10月	「3年B組金八先生」で性同一性障害をテーマにした シリーズが放映される
2003年7月	「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」成立
2018年4月	性別適合手術に公的医療保険の適用を開始

日本国内で性同一性障害(GID)の性別適合手術が行われるようになったのは、今から25年ほど前のことです。いや、実際には戦後間もない1950～51年に行われた事例が存在していたのですが⁽³⁾、その後1969年に起きたいわゆる「ブルーボーイ事件」を巡る司法判決の影響⁽⁴⁾により、性別を変更する手術を合法的に行うことができない状況が続いていました。

このことは、トランスジェンダー当事者の死活に関わる問題でした。身体的性別を手術で作り直さなければ日常の生活をストレスなく過ごすことが困難な当事者が数多くいたためです。性同一性障害という診断名が医学的に確立されたのは1980年から1990年にかけてのことですが、それでも日本国内の状況に変わりはありませんでした。当事者や医療関係者の必死の努力によって治療のガイドラインが制定されたのは1997年のことで、それによって日本国内でも性別適合手術を行うことが可能になりました。

性同一性障害が広く世の中に知られるようになったのは、2001年に金八先生のドラマで取り上げられたことがきっかけと言われています。社会的に認知が広がっていく一方で、いくら外見や身体的な性別を望みの性別に近づけても、戸籍や身分証明書の性別が元のままになっていることが、望む相手との婚姻や社会的生活を送る上で大きな障害となって残っていました。そのことが原因で、人生そのものを諦めてしまった当事者は少なくありません。

性別適合手術を受けた人が戸籍の性別を変更する法律(いわゆる「特例法」)が成立したのは2003年のことです。この法律は、多くの当事者の命を救ったと言われています。

(3) 永井明子の事例が存在することが、三橋順子さんの調査によって判明しています。その概要については、中央大学とLLAN共催の連続公開講座「LGBTをめぐる法と社会」の資料に掲載されています。

https://www.chuo-u.ac.jp/uploads/2018/10/9554_310264.pdf

(4) 医療行為としての要件を満たした手術とは認められず、当時の優生保護法 第二十八条に違反するという判断。

GID 学会

GID 学会

⇒ 性同一性障害(GID)を専門に扱う学会（1999年3月設立）

（特徴）

医療関係者だけでなく、心理学・社会学・法律分野の専門家、
GID 当事者やその家族も参加している

日本国内には、性同一性障害(GID)を専門に取り扱う学会として GID 学会⁽⁵⁾があります。

学会は毎年3月に開催されます。GID の治療はどうあるべきかという指針について、当事者と医療関係者が二人三脚で進めてきた歴史があることから、この学会には医学や臨床心理学の専門家だけでなく、GID の診断を受けた当事者やその家族も数多く参加しており、当事者交流の場としても機能しています。治療面だけでなく当事者の社会的困難を解決するという観点から、ジェンダーを取り扱う社会学の専門家もいて、性別変更に関する法律の制定を目指した経緯から法律分野の関係者も加わっていた時期もありました。

医学分野の学会でありながら、医学以外の多種多様な分野の専門家や当事者が関わっていることが、他の学会にはない非常にユニークな特徴であるといえます。

(5) GID 学会のホームページ

<http://www.gid-soc.org/>

GID の治療を受けるには

ジェンダー外来の探し方

- ・全国各地の精神保健福祉センターあるいは保健所に問い合わせる
- ・GID 学会認定医の資格を有しているかどうかが一つの目安

ところで、身体的な性別違和を抱えている当事者たちと関わっていると「ジェンダー外来を受診したいが、どうやって受診先を探したらよいか？」という問い合わせを受けることがあります。当事者の多くが知りたいことですが、ジェンダー外来に関する情報は全国各地の精神保健福祉センター⁽⁶⁾あるいは保健所といった公的機関が情報を持っていますので、まずはそこに問い合わせることをお勧めします。

さらに、先ほど説明した GID 学会では、性同一性障害(GID)の治療を行うエキスパートとして「GID 学会認定医⁽⁷⁾」の制度を設けているので、その資格を持っているかどうかを受診先を決める一つの目安になるかと思います。ちなみに、「ぼくゼロ」に登場する医師の方々も GID 学会認定医の有資格者です。

なお、上記の公的機関はあくまでもジェンダー外来のある病院・クリニックを情報提供するだけです。ジェンダー外来を受け持つ医師の GID に対する考え方や治療方針にはかなり差があるのが実態です。一口にジェンダー外来といっても、大学病院もあれば美容外科がメインの病院もありますし、GID の診断書を出すかどうか判断基準や、診断書を出すまでの診察回数も医師によってまちまちです。ですので、ジェンダー外来は医師との相性を踏まえて上で受診者本人が選ぶことが非常に重要で、インターネットで聞き伝わる情報を集めるだけではなく実際に本人が受診して確かめることが何よりも大事です。

注意事項として、ジェンダー外来のある病院・クリニックは大都市圏に集中しており、地方在住の方だと県外での受診となる可能性があります。また、ジェンダー外来はいずれも完全予約制で、しかも初診が2～3ヶ月待ちというのが診療現場での実態ですので、二次性徴抑制療法・ホルモン療法を受けることを前提にお考えの方は、初診までの待ち期間を踏まえた上でジェンダー外来選びを進めてください。

なお、中学生以下の受診には必ず保護者同伴が必要となります。

(6) 全国の精神保健福祉センター一覧

<https://www.zmhwc.jp/centerlist.html>

(7) GID 学会認定医一覧

<https://www.okayama-u.ac.jp/user/jsgid/ninteiitiran.html>

GID の「脱病理化」

性同一性障害(GID)という用語がなくなる？

ICD (International Classification of Diseases)

WHO が作成する国際疾病分類

ICD-10 (1990 年 WHA 承認)

性同一性障害 (Gender Identity Disorder)

- ・ 脱病理化
(精神疾患のリストから外れる)
- ・ 身体的な性別違和に適用
(身体治療に重点を置く)

ICD-11 (2019 年 WHA 承認)

性別不合 (Gender Incongruence)

..... GID 学会も学会名が変更になる？

ところで、性同一性障害(GID)という用語ですが、実は近い将来に消滅することが決まっています。

日本では、病名の診断基準として ICD が使われています。これは WHO が作成しているもので、現在使われているバージョンは ICD-10 です。その新しいバージョンである ICD-11 が 2019 年に世界保健総会 (WHA) で承認され、2022 年から運用が始まることになりました。その背景に関しては針間先生の著書⁽⁸⁾に詳しく書かれており、一般の方にも理解しやすい内容となっています。

ICD-11 では、性同一性障害は「性別不合」という用語に置き換えられる見込みで、その定義も改められました。大きな変更点は大きく分けて 2 つあります。

1 つは、精神疾患のリストから外され「疾患」ではなく「状態」として扱われることになったことです。病気ではないが、妊娠などと同じように身体的な医療を必要とする状態である、ということです。精神疾患と言うと「精神の疾患なのだから、治すのは精神の方でなければならない」というイメージを持たれがちになりますが、**現実には精神の方を「治す」ことは不可能である**ことが長年の臨床経験で分かっているからです。精神が身体に耐えきれない場合は、精神に合わせて身体を作り直すことで問題を解決するのです。

もう 1 つの変更点は、その対象を身体的治療に絞り込んだことです。つまり、ICD-11 では性同一性障害の「脱病理化」を図りつつ、身体的な治療をスムーズに行うための方針を整備した、と言えます。日本国内での健康保険適用も、従来通りの扱いは維持されます。

(8) 「性別違和・性別不合へ — 性同一性障害から何が変わったか」(針間 克己 著)

<https://www.amazon.co.jp/dp/4846119157>

GID の治療内容

精神療法

⇒ 精神的なサポート、カムアウトの検討、実生活経験の支援、精神的安定の回復

ホルモン補充療法 (HRT)

⇒ 望む性別に対応したホルモン製剤の投与

原則として 18 歳以上（条件付きで 15 歳以上）であることが必要

15 歳未満でも、二次性徴抑制療法が適用されるケースがある

乳房切除手術

⇒ 18 歳以上であることが必要

性別適合手術 (SRS)

⇒ 性腺の切除、および本人の希望に応じた外性器・内性器の形成

希望する性別での実生活経験を十分に積んでおり、かつ成年であることが必要

性同一性障害(GID)の診断を受けるとガイドラインに沿った治療が行われます。治療には、精神科領域の治療である精神療法と、身体的領域であるホルモン補充療法・乳房切除手術・性別適合手術があります。

第一に行われるのは精神療法で、本人を精神的にサポートする以外に、カムアウトが必要な場合の段取りの検討、希望する性別での実生活経験の支援といった内容を含んでおり、身体的治療が進んでいる間も継続されます。なお、うつ病など精神的合併症がある場合には身体的治療よりも精神療法が優先されます。

精神療法を経ても本人の苦痛が軽減されない場合は、身体的治療が行われます。その代表的なものとしてはホルモン補充療法で、身体的な性別を希望する性別に近づけるために行われます。ただし、ホルモン療法には肝機能障害や血栓症といった副作用の可能性があるため、定期的な血液検査が欠かせません。なお、第二次性徴が始まる前であれば、その発現を遅らせる（例えば、身体的女性の背丈の伸びが止まるのを遅らせる）ために二次性徴抑制療法が適用される場合があります。

性別適合手術は、元の身体的性別の特徴を完全に無くすために行われます。現時点では法的な性別を変更するための必要条件になっていることから、手術しなくても普段の日常生活は十分問題ないと感じているのに、法的な性別変更に必要なため仕方なく手術を受ける人もいます。その一方で、持病などの身体的事情などによって、本人が希望してもホルモン療法や性別適合手術を受けられないというケースもあります。

どのステージまで治療を受けるかは本人次第であり、その選択は本人がどう生きていくかに直結するものであるため、本人の意思によって決断されるべきものです。

GID の診断・治療に対する健康保険適用状況

保険適用	精神療法・染色体検査・ホルモン検査・心理検査
条件付きで保険適用	乳房切除手術・性別適合手術 (SRS) → ホルモン療法を受けた人は保険適用できない (いわゆる混合診療問題)
保険適用外	ホルモン補充療法 (HRT) ※ 戸籍の性別変更後は保険適用可能
医療外の費用	診断書発行・性別変更判定会議・カウンセリング

「ぼくゼロ」の映画の中では、主人公が手術費用を工面するシーンが出てきます。性別適合手術は一般的に実費で数百万円程度かかるため、金銭面では性別変更する上で最も高いハードルとなっています。

性同一性障害(GID)の診断・治療に関する健康保険の適用状況を上にまとめてみました。健康保険が適用(受診者の3割負担)となるのは、基本的にGIDの診断に必要な検査と精神療法に限られます。ホルモン療法については戸籍の性別変更後に保険適用可能となる運用がなされているようですが、これは法的な性別のホルモンが身体から出ないため更年期障害と同様の治療を行うという解釈のようです。

最近のトピックとして、2018年から国内の指定病院で手術を受けた場合に限り健康保険が適用されるようになりました。ところが実際には、いわゆる混合診療問題⁽⁹⁾のために、保険適用外であるホルモン両方を受けた人は性別適合手術を保険適用で受けることができません。

ホルモン療法を受けてから手術を受ける人の方が圧倒的に多いため、これは非常に大きな問題です。また、保険適用がなければ医療行為が点数化されないため治療費が全国一律とはならず、医師の言い値によって治療費が決まってしまうという問題もあります。そのため、ホルモン療法もなんとか保険適用にできないかと、当事者団体が中心となって模索を続けている状況です。

(9) 混合診療に関する問題

混合診療とは、同一の疾患に対して保険診療と自由診療を組み合わせた治療のことで、日本の保険診療において認められていません。そのため、性同一性障害の診断を受けて自由診療(ホルモン療法)を受けた場合には、保険診療(性別適合手術)も全額自費負担で受けなければならなくなります。

性別適合手術の保険適用が開始された2018年4月からの1年間で、国内の指定病院で行われた手術件数は約40件であったのに対して、保険適用された事例は4件のみと1割程度に留まっています。(共同通信 2019/6/23)

トランスジェンダーの戸籍変更

名前を変えたい（戸籍上の名前を変更したい）

⇒ 「正当な事由」によって家庭裁判所に申し立てを行い、許可を得る

- ↑
- ・ 通称名を長年使用していた場合
- ・ 性同一性障害（医師の診断書が必要）

・ 性別を変えたい（戸籍上の名前を変更したい）

⇒ 性別変更の要件を満たした上で家庭裁判所に申し立てを行う

トランスジェンダーが性別を変更するために超えなければならないハードルは、ホルモン療法や性別適合手術といった身体的治療ではありません。見た目や身体的な性別を変えても、戸籍の名前や性別が元のままでは社会生活を送る上で支障をきたしてしまいますので、これらを何とかしなければなりません。

戸籍の名前を変更するには、本人が住所地の家庭裁判所に申し立てを行い、その許可を得る必要がありますが、氏名は個人を特定するための重要な法的情報であることから、名前を変更しなければ社会生活において支障をきたすような「正当の事由」が必要であり、個人的な趣味や思想・信条による改名は認められていません⁽¹⁰⁾。

トランスジェンダーが改名できるパターンは2通りあります。一つは、通称名を長年継続して使用していた場合で（目安としては5年以上）、郵便物や給料明細・学生証・診察券・会員証があればそれらを使用実績の根拠として使用することができます。もう一つは、性同一性障害の診断が下りている場合で、この場合であれば通称名の使用実績は半年から1年程度で済むケースが多いですが、身体面の治療状況によっては使用実績がなくても改名の許可が出る場合もあるようです。

もっとも、改名の条件は厳密に定められたものではないため裁判官の裁量次第になり易く、裁判官個人の価値観に左右される面もあります。そうした事情から、地方在住で改名を考えている当事者の中には、わざわざ大都市圏に引っ越して住民登録を行ってから、その地にある家庭裁判所に改名申し立てを行う人もいたりします。

戸籍の性別を変更したい場合にも住所地の家庭裁判所に申し立て行いますが、そのためには性別適合手術を受けているなど所定の条件をすべて満たしている必要があります。申し立ての審理をパスして家庭裁判所による性別変更の審判が行われると、申し立て人は現在在籍する戸籍からは除籍され、同人を筆頭者とする新戸籍が編製されることによって戸籍の性別変更処理が完了します。

(10) 名の変更許可（裁判所 HP）

https://www.courts.go.jp/saiban/syurui/syurui_kazi/kazi_06_20/index.html

法的な性別の変更条件

1. 二人以上の医師により、性同一性障害であることが診断されていること
 2. 20 歳以上であること
 3. 現に婚姻をしていないこと
 4. 現に未成年の子がいないこと
 5. 生殖腺がないこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること
 6. 他の性別の性器の部分に近似する外観を備えていること
-

性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律（いわゆる特例法）⁽¹¹⁾が制定された際に、戸籍の性別を変更するための条件⁽¹²⁾が定められました。その当時としては当事者たちにとって画期的なものであったことには間違いありませんが、制定から 20 年近くが経過して今となつては世界のデファクト・スタンダードからは時代遅れとなりつつある面もあります。

要件のうち、**とりわけ問題と見なされているのは 4 と 5** です。4.の条件は元々「現に子がいないこと」で、特例法の成立にあたり「伝統的な家族観」を重んじる保守勢力の賛成を得るために止む無く入れざるを得なかったと伝わっていますが、条件が緩和された現行規定においても子供が成人するまでの最長 20 年間は当事者にとってあまりにも長く、子供を持つ当事者によって裁判で争われています。5.については、2014 年に WHO など国連 5 機関から断種手術の強制を廃絶するように求める共同声明が出されていますが、その一方で最高裁では 2019 年に手術要件を合憲とする判決を出しています⁽¹³⁾。同年に、旧優生保護法により強制的に不妊手術を受けさせられた障害者に対して、政府が謝罪し救済法が制定されたのとは対照的です。

その背景としては、日本の法体系や社会システムが子供のいる夫婦家庭といった従来の伝統的家族観に沿って作り込まれ過ぎていることが挙げられます。もし手術要件がなければ、同性間で子供が生まれるという現行法体系で想定していないことが起きる可能性があるため、**法律の都合により当事者に課せられた足枷**と言うこともできるでしょう。

大局的に見れば、同性婚の問題もトランスジェンダーとは無関係な問題ではないということです。

(11) 性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律

<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=415AC1000000111>

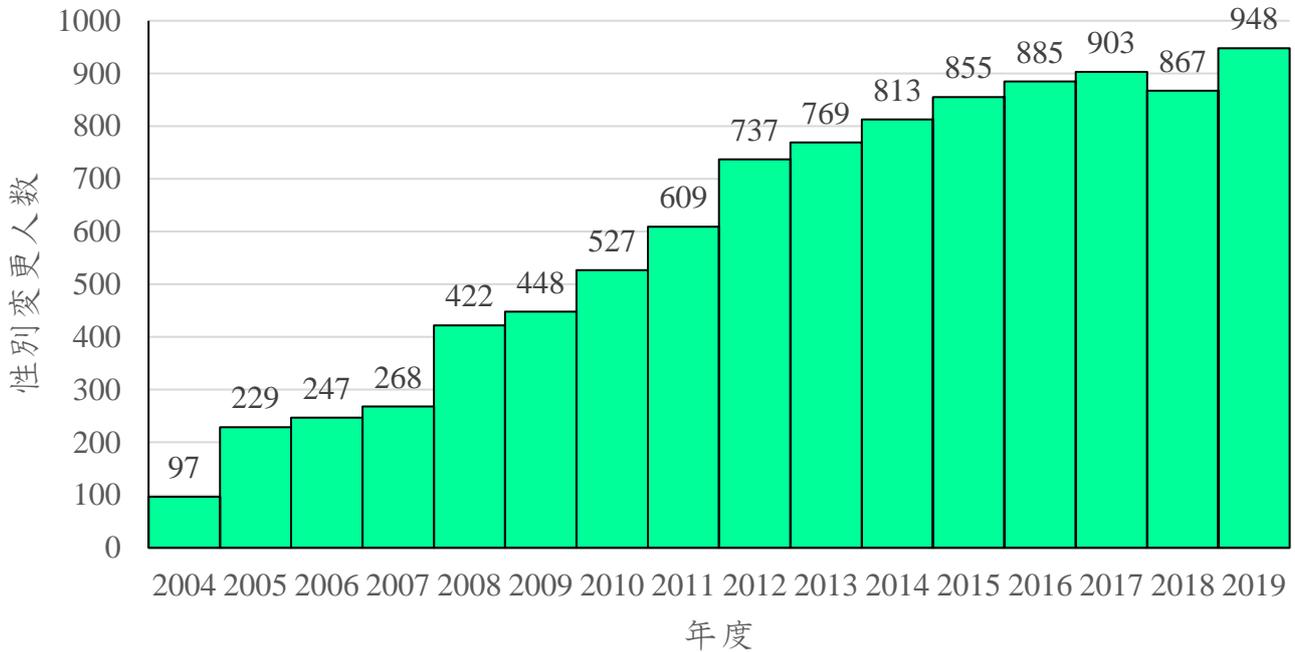
(12) 性別の取扱いの変更要件（裁判所 HP）

https://www.courts.go.jp/saiban/syurui/syurui_kazi/kazi_06_23/index.html

(13) 最高裁判例 性別の取扱いの変更申立て却下審判に対する抗告棄却決定に対する特別抗告事件
（最高裁判所 平成 31 年 1 月 23 日、集民 第 261 号 1 頁）

https://www.courts.go.jp/app/files/hanrei_jp/274/088274_hanrei.pdf

特例法施行後の性別変更件数



出典：裁判所 司法統計

特例法が 2004 年に施行されてから、実際に戸籍の性別を変更した人数の統計データです⁽¹⁴⁾。ここ数年は年間 800 人から 900 人程度で推移しており、司法統計によれば 2019 年までの 15 年間で延べ人数は約 1 万人に達しようとしています⁽¹⁵⁾。

まだまだ諸問題はありますが、性別を変更するプロセスは完全に定着したと言えます。

(14) 裁判所 司法統計より 家事審判事件の受理, 既済, 未済手続別事件別件数—全家庭裁判所
(平成 16 年度～令和元年度)

https://www.courts.go.jp/app/sihotokei_jp/search

(15) 「性別の変更、1 万人突破目前」 (共同通信 2021/1/3)

<https://this.kiji.is/718434117537628160>

性同一性障害(GID)に関連する裁判事例 (1)

性同一性障害の男性を父親と認定 (2013/12/10 最高裁判所)

戸籍を女性から変更した男性と婚姻した妻が、第三者の精子提供によって出産。出生届を提出したところ、夫婦の子と認められず戸籍の父親欄が空欄とされた。
⇒ 最高裁の判決で、戸籍上の父親として認められる (3 対 2 の多数意見)

・ 性同一性障害の夫も、民法第 772 条が定める嫡出推定の適用を受けると判断

性同一性障害の当事者が特例法によって戸籍の性別を変更できるようになったことで、(当事者から見て)望みの異性と婚姻することが可能となりました。その一方で、トランスジェンダー男性(女性から男性に性別変更した当事者)は造精機能を持たないため、第三者から精子提供を受けなければ夫婦の子供を作ることができません。かつて、トランスジェンダー男性がそうしてできた子供の父親として法的に認められるのか裁判になったことがありました。

問題になったのは民法第 772 条にある「嫡出の推定」です。事実上の離婚や遠距離別居によって夫婦間に性的関係を持つ機会がなかったことが明らかな場合には嫡出の推定を受けないという判断が過去の最高裁判決でなされており、それを根拠に地裁・高裁は嫡出の推定を受けない(つまりトランスジェンダー男性を戸籍上の父と認めない)と判断しました。しかし、特例法によって女性から男性に性別変更をした者は嫡出の推定についても一般男性と同等の扱いを受けると最高裁が判断したことで結論が覆りました^(16,17)。ただ、最高裁判事 5 人のうち 3 人による多数意見で決まったギリギリの判決でした。

なお、子供を分娩した母親が戸籍上の母となることが過去の最高裁判決⁽¹⁸⁾によって示されたことから、トランスジェンダー女性は戸籍上の母親になることができませんが、特別養子縁組によって母親となった事例があります。そもそも民法第 772 条の規定は明治時代の産物であり、近年では無戸籍問題の原因にもなっていることから早急な改正が望まれますが、立法府たる国会の動きは鈍く未だその目途は立っていません。

(16) 「性同一性障害の男性を『父』と認定、最高裁 第三者から精子提供」(HuffPost 2013/12/11)

https://www.huffingtonpost.jp/2013/12/11/story_n_4423781.html

(17) 最高裁判例 戸籍訂正許可申立て却下審判に対する抗告棄却決定に対する許可抗告事件

(最高裁判所 平成 25 年 12 月 10 日、民集 第 67 卷 9 号 1847 頁)

https://www.courts.go.jp/app/files/hanrei_jp/810/083810_hanrei.pdf

(18) 最高裁判例 町村長の処分に対する不服申立て却下審判に対する抗告審の変更決定に対する許可抗告事件

(最高裁判所 平成 19 年 3 月 23 日、高田延彦・向井亜紀夫妻が原告となった代理出産を巡る訴訟として有名)

https://www.courts.go.jp/app/files/hanrei_jp/390/034390_hanrei.pdf

性同一性障害(GID)に関連する裁判事例 (2)

性別変更の取り消し (2017/11/30 家庭裁判所)

性別を変更したことを後悔するようになり、日常生活を元の性別で送るようになった

⇒ GID を診断した医師が誤診したとの意見書を家裁に提出し、認められた

- ・ 実生活経験(RLE)を十分に積んでも、いざ性別移行して経験してみないと分からないこともある
 - ・ 性別移行の途中で「行き場を失う」当事者もいる
-

また、性別変更の事例が数多く積み重ねられると、専門家ですら想定していなかった問題も少数ではあるもの出てくるようになりました。その1つが、変更した性別での生活に馴染むことができず、結局は元の性別の生活に戻ってしまう当事者がいるということです⁽¹⁹⁾。

特例法は、性別の自認は揺るがないという前提に立っています。そもそも、マジョリティーの人々は性別の自認が揺るがないのですから、ある意味当然の成り行きと言えます。

それでも、本人の勘違いを防止する目的で、GID の治療のガイドラインでは希望する生活で1年以上の実生活経験(RLE)を積むことを性別変更のための目安としています。しかし実際には、元の性別に耐えられない違和感があって、反対側の性別に移行して適応しようとしたけれど、結局無理だったという当事者が存在した、ということです。

また、性別移行の途中で、自分が向かおうとしている反対側の性別に違和感や疑問を覚えて、かといって元の性別にも戻れず結果として行き場所を失ってしまう当事者も一定数います。

(19) 「性別変更の取り消し、家裁が認める 医師『誤診した』」 (朝日新聞 2018/3/1)

<https://www.asahi.com/articles/ASL3156DVL31UTIL02T.html>

X ジェンダーとは？

X ジェンダー (X-gender)

⇒自らの性別（性自認）を男女二分法で表現しない人

・性自認を判断基準としている点がトランスジェンダーと異なる

日本国内の当事者コミュニティの間で、自然発生的に生まれた概念
現在の意味合いで定着したのは 2005 年頃

実は、「X ジェンダー」という言葉に明確な定義はありません。あえて定義をつけるとするならば、『自らの性別を男女二分法で表現しない人』ということになるのでしょうか。

トランスジェンダーという概念との違いは、大きく分けて2つあります。1つは、初めから男性か女性かという二分法に則っていないことです。もう1つは、トランスジェンダーは実際に生活する性別に拠るものであるものに対して、X ジェンダーは性自認、つまり自分のことをどう認識しているかで判断しているということです。

そのため、X ジェンダーが実際にどのような性別で実際の生活を過ごしているかは個人差が大きいようです。「ぼくゼロ」の主人公のように性別が曖昧な外見で生活する人もいれば、GID の治療のガイドラインに則り反対側の性別に移行する人も、男性あるいは女性のまま社会的生活を送っている人もいます。

しかし、反対側の性別に移行した人も、性別移行をしないまま生活している人も、それは本人が理想とするゴールなのか？と聞かれたら、おそらく多くの X ジェンダー当事者は違うと答えるでしょう。性別移行した人は、元の性別のままで生きていくよりも、性別を変更して生き方が（ベストではないが）マシだからその選択をしたに過ぎません。そして、元の性別のままで生活している人にとって「男性・女性として生活することは、自分が男性・女性であることとイコールではない」のです。

ジェンダーの理想の着地点と現実の間にギャップを抱えながら生きているのが X ジェンダーの特徴です。

X ジェンダーという言葉は、1990 年代に関西のクィアコミュニティの間で自然発生的に生まれた概念です。発生当時はトランスジェンダーと同様にその人の生き様を表現する概念だったのですが、その言葉がインターネット上で拡散されていくうちに、いつしか性自認を表現する概念として当事者の間で使われるようになり、2005 年頃にはその意味合いで定着したようです⁽²⁰⁾。

(20) 「X ジェンダーって何？」(Label X 編著) より

「X ジェンダーの登場——人のケースから X ジェンダーについて考える」(SPF デール)

<https://www.amazon.co.jp/dp/4846116158/>

トランスジェンダーと MtF/FtM/MtX/FtX

MtF/FtM

⇒医学的にはトランスジェンダーと同義の意味合いで使われるが、当事者間では性自認を表すニュアンスで使われるケースが多い

- ・ MtF …… 出生時の身体的性別は男性だが、性自認は女性である人
- ・ FtM …… 出生時の身体的性別は女性だが、性自認は男性である人

MtX/FtX

⇒上記 MtF/FtM の概念から派生的に使われるようになった用語

- ・ MtX …… 出生時の身体的性別は男性だが、性自認は X ジェンダーである人
 - ・ FtX …… 出生時の身体的性別は女性だが、性自認は X ジェンダーである人
-

トランスジェンダーという言葉の類義語として、MtF・FtM という言葉があります。MtF (Male to Female) は男性から女性へ性別移行する（または性別移行した）人を指し、FtM (Female to Male) はその逆です。これらは、医学的にはトランスジェンダーと同義の意味合いで使われます。つまり、MtF とはトランスジェンダー女性で、FtM とはトランスジェンダー男性です。

ところが、性同一性障害(GID)の治療を受ける側の当事者コミュニティでは、MtF・FtM という用語は性別移行する人という意味合いではなく、性自認を表す用語として使われるケースが多く見受けられます。なぜなら、当事者コミュニティにはこれから性別移行をしようと考えている人もいれば、「自分は GID なのかもしれない」と思って当事者コミュニティのドアをノックする人もいるからです。そういう人たちにとっては、自分のことを説明する言葉として MtF・FtM を使えば自分のことを簡潔に説明できる訳で、同じ単語でも医療者サイドと当事者サイドでニュアンスに差が出るのも自然な流れと言えるでしょう。

MtF・FtM という単語から派生的に生まれた用語が MtX・FtX です。MtX (Male to X)、FtX (Female to X) はいずれも性自認が X ジェンダーであることを表します。

なお、MtF と MtX をまとめて "Mt"、FtM と FtX をまとめて "Ft" と表記することも当事者間で散見されます。Mt とは性自認が男性ではない身体的男性のことを、Ft とは性自認が女声ではない身体的女性のことを包括的に指すため、共通する悩み(例えば身体的な性別違和)を語る上で使われることが多いようです。

これ以外にも、元の性別が女性であった人が男性に性別移行した後に、ジェンダーの揺り戻しが起きて最終的に X ジェンダーに落ち着いた人のケースを FtMtX と表現することもあり、そのバリエーションには奥が深いものがあります。

マジョリティーの目線で見ると性別の世界

なぜ世の中は男女二分法なのか？

(1) 性指向的に同性・異性の区分が明確

- ・ 異性愛者が「好き」になる対象は異性に限られる
- ・ 異性に対する「好き」という感覚を、同性に対して感じることはあり得ない

(2) 同性の人たちに対して同質感・帰属感を持っている

- ・ 同質感 …… 自分も同質であるという感覚
 - ・ 帰属感 …… 自分もその集合の一員であるという帰属感
-

ところで、なぜ世の中は男女だけの性別二分法が暗黙の共通認識となっているのでしょうか。このことは、マジョリティーの人たちに限らず、LGBT と総称される同性愛者や多くのトランスジェンダーにとっても同じです。X ジェンダーのことを説明する前に、多くの人にとっての「当たり前」すぎて議論されることもなかった性別二分法の背景について、いちどマジョリティーの目線で整理することにしましょう。

「ぼくゼロ」の映画では、「性自認」「性指向」「身体の性」「性表現」の4つが性の要素として取り上げられていました。マジョリティーの人は、そのうち「性自認」「身体の性」「性表現」の3つが完全に一致するので、そうした人が普段意識することになる性別の要素は「自分の性別」と「好きだと感じる性別」の2つだけになります。

マジョリティーの人は異性を好きだと感じる人（異性愛者）ですが、この「好き」という感覚を同性の人に対して感じることはありません。より正確には、「あり得ない」と形容した方がよいでしょう。つまり、「好きだと感じる性別」である異性と、そうでない同性とは、**感覚的に明確に区別される**のです。

男女二分法を裏付けるもう一つの要素は、マジョリティーの人たちは同性の人たちに対して同質感・帰属感を持っていることです。例えば、男性だけ・女性だけの飲み会や井戸端会議で（一昔前の喫煙室もそうでしたが）、男性だけ・女性だけの話をしていくうちに皆で共感した経験を持つ方は数多いと思います。

この、**帰属感・同質感**というのが、**自分の性別を認識する上で一番大事**なところです。女性として、あるいは男性としての**自己肯定感**を高めることに大いに関係しているからです。同性愛者や、男女どちらにも性的に惹かれることがないアセクシュアル（無性愛者）と呼ばれる人たちは、性指向に限ってはマジョリティーの人と一致性を見いだすことができませんが、それ以外の面で帰属感・同質感を感じることはできます。

そうして自分自身を含む同性と、それ以外を異性として感覚的にはっきり区別していることが、男女という性別二分法を社会における暗黙の共通認識にしている背景としてあるわけです。

X ジェンダーから見た性別の世界

- ・ マジョリティー社会の男性にも女性にも、同質感・帰属感を感じていない
(身体的な性別違和があるか、その性別に対して共感が持てない)
⇒ どちら側でもないから X ジェンダー (消去法による選択)
- ・ X ジェンダーには、同性愛・異性愛でない性指向をもつ当事者が多い
⇒ 自らを男・女に結び付ける感覚が弱く、「性別迷子」になりやすい

前のページでは、マジョリティーの人たちは自分と同じ性別に対する同質感・帰属感を得ることによって自己肯定感を得ていると書きました。それに対して、マジョリティー社会の男性に対しても女性に対しても帰属感、同質感を感じていない(感じるができない)のが X ジェンダーです。世間のどちら側の性別であっても、自己肯定感をマジョリティーの人並みに得ることができないのです。

その要因は大きく分けて 2 つです。X ジェンダーには身体的な性別違和(身体の性的特徴に対する嫌悪感)を抱える人が多くいますが、身体的な性別違和があることは、その性別に対する同質感・帰属感が持たなくなる決定的な要因となります。例えば、「ぼくゼロ」の主人公は自分の女性としての身体を受け入れられなかったのですが、そのことは「自分は女性ではない」という自己認識と密接にリンクしているのです。

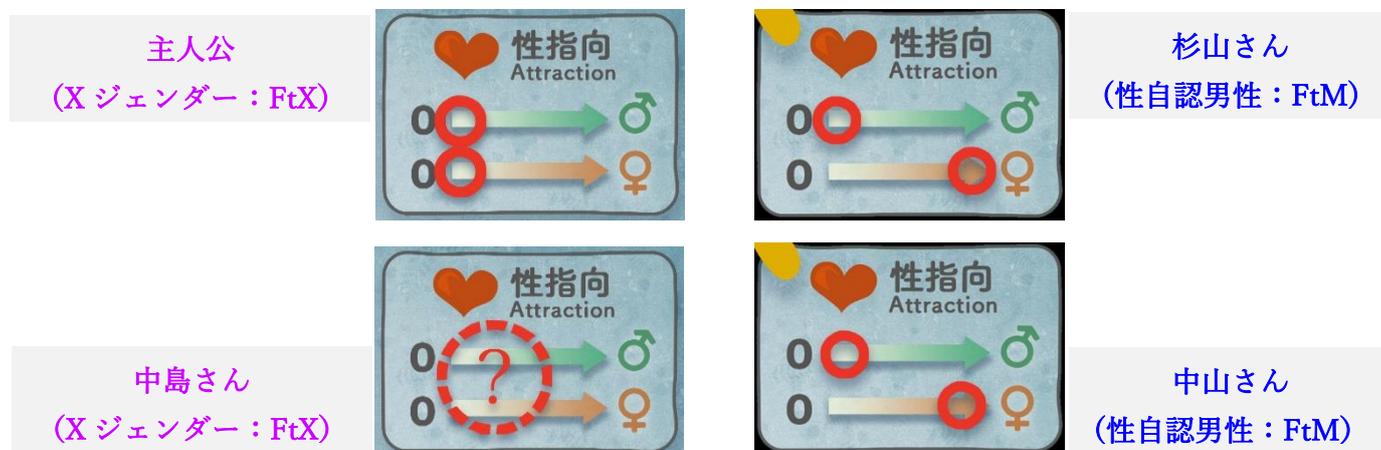
その一方で、X ジェンダー当事者のなかには「ぼくゼロ」に登場した中島さんのように、苦しみを自覚するほどの身体的な性別違和を持たず、手術を受ける必要性を感じない人もいます。例えば、身体的女性であっても胸が平べったくて嫌悪感を覚えずに済んでいるようなケースです。しかし、そのような場合でも女性の服装やメイクに抵抗感があったり、いわゆる「女子トーク」に加わることに楽しさを感じるができなかったり共感が持てないことが積み重なると、その人は女性という性別への同質感・帰属感を得ることができません。それが、もう 1 つの要因です。

多くの X ジェンダー当事者は、そうしてマジョリティー社会の男性側にも女性側にも属することができないことを自己認識した上で、消去法によって自らの立ち位置を自覚するに至っています。女性の身体であることが嫌で耐えられない、でも自分が世の中の男性と同じような存在であるとは実感できないし男性になりたいとも思えない、だから自分は X ジェンダーだ……といった具合です。

また、X ジェンダーには性指向が男女どちらか一方に限定される同性愛や異性愛にあてはまらない当事者が多くいます。性指向が男女のどちらかに縛られないことは、男女を区別して認識する手掛かりの 1 つを持たないことを意味するため、自らを男女のどちらかに結び付ける感覚が弱くなります。

X ジェンダーの世界には「性別迷子」という言葉があります。男女を区別する感覚的な手掛かりを持っていないということは、自分の性別が何なのかに迷ってしまうになりやすい要因になります。

性指向が性自認に与える影響



「ぼくが『性別ゼロ』に戻るとき」より

「ぼくゼロ」では、中島さんが登場するシーンとエンドロールの直前で、登場人物の4つの性（性自認・性指向・身体の性・性表現）を説明する場面が出てきます。映画を観た人の中には、X ジェンダーと性自認男性との間で性指向に明確な差が傾向として出ていたことに気が付いた方もいたかもしれません。

上の図は、「ぼくゼロ」の映画の中から4人の登場人物の性指向を抜き出してきたものです。この4人に共通するのは、女性の身体で生まれ育てられてきたことです。そのうち、性自認が男性(FtM)である杉山さん、中山さんの2人は性指向が女性、つまりマジョリティーと同じ異性愛者です。その一方で、性自認がX ジェンダー(FtX)である2人は性指向が無い、その存在そのものが曖昧なものになっています。

実は、そこが X ジェンダーと性自認男性に分かれる重要なポイントの一つです。性自認は自分自身に関することである一方、性指向は相手に関する事なので、一見無関係なように思えます。しかし、**現実には性指向は性自認に影響を与えているのです。**この傾向は、女性として生まれてきた人に顕著に表れます。

なぜなら、FtM あるいは FtX の当事者にとって性指向が女性であることは、男性としての自己肯定感を高めることに繋がりやすい社会環境があるためです。身体的に女性の方がホルモン療法を受けると見た目が男性に近づいていき、世間の女性からも男性として見られるようになります。性指向の相手から男性として見られることで男性としての自信が身についていき、より男性らしくなろうとするフィードバックが働くわけです。異性にモテることが、異性愛者の自己肯定感が高まる要素の一つであるとも言えるでしょう。

FtX の X ジェンダーの当事者の中には、性指向がはっきり女性である人も少なからずいます。そうした人は、自らのことを「男性寄りの X ジェンダー」であると表現するケースが多いです。

性指向の「引力」と「反発力」

性指向は「好きになる性別」だけを表すものか？

⇒ 異性愛者の場合……

性指向は、異性に対する「引力」、同性に対する「反発力」として作用する

- ・相手を「性的に惹かれ合う」か「性的関係を持ってない」のどちらかに分類する感覚が、男女二分法の下地になっているのではないか

性指向は、一般に「好きになる性別」という説明がなされます。異性が好きになる人は異性愛者、同性が好きになる人は同性愛者です。ですが、実際のところ性指向を決定付けるのは「好き」という感覚だけなのではないでしょうか。

例えばマジョリティー男性の場合、女性のことは性的に好きだと感じる一方で、男性に対してはどうでしょう。友情が表出したことによって男性同士が抱擁することは実際にありますが、性的な肉体関係となると話は違いますよね。男性同士によるキスを強要されようものなら、男性諸氏は途端に拒絶反応を示します。

つまり、異性愛とは異性に対しては「引力」として作用する一方、同性に対しては「反発力」として作用する一面を持っているようです。磁石に例えるならば、N 極と S 極が引つき合い、N 極同士や S 極同士は反発するようなものです。逆に同性愛は N 極同士、S 極同士が引かれ合い、N 極と S 極は反発し合う性質のものであると捉えることができるかもしれません。なぜなら、異性としか法的に婚姻することができないので頑張って異性と関係を持とうとしたけど無理だった、結婚してみたもののセックスレスの夫婦関係になったという同性愛の当事者は相当数存在するからです。

ところで、上に書いたマジョリティー男性と同じような話は、身体的女性で性自認が女性でない人(FtM, FtX)でもしばしば耳にする話です。男性とは性的な関係を持つことができない、嫌悪感しかないというのです。おそらく、この嫌悪感というのはマジョリティー男性が感じるものと同質のものではないでしょうか。そして、自己の身体的性別が男性であろうが女性であろうが変わらない性質のものなのではないでしょうか（もし、マジョリティー男性を身体的女性に改造することができたとして、その人が男性と性的関係を持つことができるようになるか？というところ、おそらく答えは圧倒的に No でしょう）。

異性愛や同性愛が「引力」と「反発力」の両方を併せ持つものであるならば、それらが相手を「性的に惹かれ合う人」か「関係を持ってない人」のどちらかに無意識のうちに分類する感覚として作用することで、異性愛者や同性愛者が男女二分法を自然と受け入れる下地になることは十分に考えられそうです。

その一方で、引力と反発力を併せ持たない性指向（例えばアセクシュアルやパンセクシュアル）の人は、相手の性別を二分法によって捉える手段が一つ少ないと考えることはできないでしょうか。

X ジェンダーの性指向

X ジェンダーの性指向 (label X 2017 年調査)

- ・バイセクシュアル・パンセクシュアル …… 30%
- ・A セクシュアル・ノンセクシュアル・デミセクシュアル …… 26%
- ⇒ B セク&P セクと、A セク系の派閥が全体の半数以上を占める

- ・相手が男性だから・女性だからその人を好きになるのではなく、好きになるかどうかは相手の人物次第によるところが大きい
-

X ジェンダー当事者団体である label X では、過去に当事者を対象としたアンケート調査を行ったことがあります⁽²¹⁾。そのときに性指向に関する調査も行っていて、その結果を表したグラフを見るとバラバラで何の法則性も見いだせないように見えますが、類似するグループごとにまとめてみると二大派閥が浮かび上がってきます。

そのうちの一つは、バイセクシュアル・パンセクシュアルといったどちらか一方だけの性別にとらわれない性指向のグループです。もう一つは、他者に性的に惹かれることがないことがないアセクシュアルのグループです (A セクシュアル・ノンセクシュアル・デミセクシュアルが該当)。この二つのグループで全体の半分以上を占めています。

これらの性指向を持つ人たちに共通して言えそうなことは、相手が男性だから、あるいは女性だからその人を好きになる、ということではないということです。好きになるかどうかは人物本位によるところが大きいです。また磁石の話で例えるとすれば、異性愛や同性愛は磁力によって引きつけ合うような力であるのに対して、これらの性指向は磁力が全く働かないか、働いていたとしても弱い力でしかないということです。その代わり、磁力ではない何か別の力によって引きつけ合ったりすることがあるわけです。

好きになることと相手の性別がリンクしていないことは、その人にとって性別の存在意義を無価値なものにする要因のひとつになっていると考えることもできます。このことは、マジョリティーの視点から性指向を通じて X ジェンダーを読み解く手掛かりの一つになるかと思います。

もちろん、自分の性自認が X ジェンダーであることと、自分の性指向には関係性がないという当事者も多くいます。X ジェンダーであることを自認するまでの物語の数は、X ジェンダーの人数だけあるのです。

(21) 「label X の活動と X ジェンダーの現状」(label X 代表 藤原和希、GID 学会 第 20 回発表大会資料) より

「X ジェンダー当事者の多様な性指向・性質」

https://ftxmtx-x-gender.com/pdf/gid20_20180325.pdf

X ジェンダーが社会に望むこと

X ジェンダーが社会に望むこと

- ⇒ ・ X ジェンダーが存在することを、もっと多くの人に知ってほしい
- ・ 本人を性別でカテゴライズするのではなく、人物そのものを見てほしい
 - ・ 世の中から、不必要な性別欄そのものを無くしてほしい

X ジェンダーが生きていく上での課題

- ⇒ ・ 男女二分法でない生き方のロールモデルが存在しない
-

X ジェンダーという概念は誕生してからの歴史が浅く、セクシュアル・マイノリティーの世界の中でもその認知度も低いものでした。X ジェンダーという言葉が新聞などのメディアで取り上げられるようになり、世間一般の目にも触れるようになってきたのはここ 5 年ほどのことです。

そのため、現在の X ジェンダーの概念（性自認を男女二分法で表現できない人）に当てはまりながらも、X ジェンダーという言葉を知らなかったために自分が何者であるのか分からないままでいた人は、これまでも多くいました。そうした人たちは、いわゆる伝統的家族観が支配的な社会で生きづらさを感じる一方で、LGBT にも明確には当てはまらないことから生きる道筋をなかなか見出せずにいた訳ですが、「X ジェンダー」という言葉を知ったことで救われた、と語る人も少なくありません。

そうした経緯もあって、「X ジェンダーが存在することを、もっと多くの人に知ってほしい」という声は X ジェンダー当事者からは多く聞かれます。とりわけ、男性・女性といった性別のレッテル貼りに苦しめられてきた当事者は多く、人間関係では「(男か女かではなく) 人として接してほしい」と口を揃えます。

また、「世の中から不必要な性別欄そのものを無くしてほしい」という声も以前から当事者の間では多いです。最近、トランスジェンダーのカミングアウト強要や採用時の性差別を無くすことを目的に履歴書から性別欄を無くす動きが出てきていますが、そのことは X ジェンダーにも歓迎されています。

その一方で、X ジェンダーには男女二分法ではない生き方のロールモデルが存在しないという課題があります。実際に、「ぼくゼロ」の主人公は男性タレントにも女性タレントにもなりきることができませんでした。当人がどう生きていきたいのか、どう生きていくのかということについては、当事者一人ひとりが自らの手で切り拓いていかなければならない課題です。

ところで、海外では X ジェンダーに類似する概念としてノンバイナリー (Non-binary) という言葉が使われ始めており、日本国内でも X ジェンダーと並行して使われる機会が増えています。X ジェンダーを取り巻く環境は今もなお流動的であり、X ジェンダーという言葉の持つ意味や、言葉の存在意義も今後変化していくのかもしれない。

更新履歴

- ・ 2021/6/6 Revision 1.0
初版リリース